和文讀本

稲垣千頴輯

巻一

ホ 2
490
1

東京帝國大學圖書
明治四十年八月廿日ガラゴ寄贈
利 49
門 1

和文讀本緒言

上古ハ、いをゆる萬葉假字（伊呂波等なり）ゝ、ゝ[illegible]
き、平假字、（いろは等なり）片假字、（イロハ等）などゝ、ふ物として
ハ、あつのりけれバ、殊ゝ意しゝ、其詞を誤らせじ
とする歌あどばうのゝゝ、萬葉假字ふても書
つれ、大方の文詞をば、萬葉假字して書うんハ、
徒ゝ字面の長くなるのゝうへゝ、字畫さへ多くて
煩しゝれバ、爲ん方あくて、不便なのゝらふ漢文
をのみ用ゐて、全く假字して書く事とてハな
うりつきど、中古平假字片假字とゝふ、最便よき

もの出來てより後ハ彼の不便なる漢字漢文をバ用るぞして事足るべきをあほ世の人さきぐより讀み習ひ書き來る癖うせぐして字としいへバ漢字文としいへバ漢文まて他ハは字も文もなきやうふ思ひて實事實學よつきての利害をばうくも考へぞたゞ漢字かき散し漢文讀みのくしるをたけく才ある樣ふ思ひとりて吾も人も其方の學ふ心をいれて先漢字用ゐならひ漢文をみ習ふほどふ許多の年月を過して筆とるばかりふなれバ齢たけ氣衰へてはのぐしき物の用ふたゝばかくゝ若き壯の程をバ徒ふ過し老て後ハは世間一般ふは不通の漢文をかき人まは煩多き漢字を教ふる事ハのみ力を費して世の爲國の爲ふはさせる益をも得せぐあゝら生涯を盡にハなぐての學者の弊まて いとも〳〵口惜しき事の限ありてこのし縱いのばうり漢字をばらく識り漢文をば巧ふかくとも世ふ之を讀む人解る人少くバ何ようはせん よくもむ人解る人多くとも御國の人悉く唐

土人あらぬバなほ常ふ口ふは御國の語を使ひ御國の音を出さんバ得有るべからんも口ふハ御國の語音を用ゐを文まは唐土の文を書あるでハ得あらぬとあらばと彼の楚人して齊語をしへさせるよりも拙き事まて。あるふ唐土人まも笑をれぬべきはいふも更ふて。いつも文と語とハ似もつかぬものふなりて。たゞ便あるきのみあらんで物學の方の甚しき害ふさんありて。もゝて御國人の物學のはのゝ〜〜〜のたゞ〜〜きハ多くハこれふよる事まて。心ある者ハ深く慨ふべき事あるまなほこゝふ心づく學者あこの事〜を此二百年ゞのり以來歌文の學漸く開けをより漢字漢文の不便あるふ事をさとりて私の著述ふハ假字文をのみ用ゐる人も多く出來まりれどあほ公ざまの文書まは假字をは用ゐさせ給はざりりれバ心ふはあらんで思ひなゞらせん方あくて時とりてハ漢めきたる文をもかゝでハ得あらざりりを今の大御代とありてより上はかゝこきや

天皇の詔旨の御書ふも假字を交へさせ給ひ下は天ざかる鄙の蝦夷の賤の子をまでもまづいろは五十音假字單語などいふものより教へ導かせ給ひて專御國語御國文を用ゐさせ給ふ事となりまさるはいとも〳〵尊く忝き大御惠ふて御代の名ふおふ明ふ治る時ふ生れあひまる人民の上ちき幸まて今ちりしを後ハえうちき字學の煩もなく語と文とは似てもつぬゆうちる違もなく吾もさとりよく人ふも教へよくなりて容易く實學實驗をもふし得つべくれバ世の爲人の爲ふ甚じくて御のづうつ大御國の御光も添ふつぎあれば心ある學者の千歳の憾も全く此大御代まぞなくあるべき但かくありとて今俄ふ漢字をな用ゐそ漢文をな讀みそといふまはあらじ其心して徒ふ年月を過して實事實學をざふ妨ぐる事ふくば心のまゝふ漢文をも誦しぬ漢詩をも歌ひねとぞよ

○真字してかける和文あり祝詞宣命古事記等假字してかける漢文あり二十一代集の序等然るに世の學者等

其體を分別せることを知らばしそ平假字一な
るをしら見れば即和文ぞと心得て近世の儒者等
のかけるをさへふ誰ぞしの和文くれぞしの
和文などいひてほめのくしる者の多きはいと
しら傍いとき事ふて詮ぞるふ和文をばうつ
て知らぬあり近世御國學の博士と世ふゆる
されたるきはの書るだよあほ漢文の癖の清
くさりたるはいとしら稀まて僅ふ一人二人あほ
を明暮漢字漢籍をのそさぞしあへる人等の
いのでのうまくは書得べきされば此書今の

世の極めて初學の誦讀の爲まとて物ちらふ
まを なるらしふめでたくうるはしき雅文ハ容
易くさとり難き方もあれば或ハ軍記或は俗
物語ふどふりさへとりて多き中ふは御國文
の體ふらぬも まと詞のあやしくさとびたる
もあれど むげふ後世のならねばさぞふお
のづから雅びとふ處ありて其方ふ罪ゆるさ
るらこちせらるたなり あほ文體の論ちる文
の解しやうふどの細やうなる事共は本朝文範
の總論ふいへれば今は僅ふ一二を下ふいふべし

○御國の語ゝは。てゝをはの係結（カヽリムスビ）といふをもあ
まて。詞をゝゝく調ふるなり。今見やすからん
ためふ。其かゝりの詞ふは□をゝるゝ。むすび
ふハ□をつく。
○└のゝゝゝゝゝはハいたゆる大段落。一は小
段落なり。
○凡て文ゝは。意の急なる時ハ。ものゝゝ語の
省のれ約まることと常ふありて。初學の輩そ
の省のれゝゝは語をゝらでは。詞づゝのひのいこの
ふそやかゝさぶき思ふことと多し。今かゝる處ふハ。
悉く傍ふ片假字して。云々と補ひ加へて示せり。
されど。中ふは。古と今と詞のつゝのひさま異ゝて。
今の世の俗語ゝり思へば。てゝをは足ゝらゝして。
てゝゝゝるやうふ思ゝるゝも。古ふは常ゝそな
ゝゝふ雅なる事ありかゝる類ハ。今そのてゝをは
はを。傍ゝ補ひ加へゝゝるもまゝあれど。多くハ
漏しゝ。
○軍記物語等ふ見えたる消息文ハ。上下を省き
て。用ある處のみを出しゝるゝ多くて。全文は
いとゝゝまれふて。但し東鑑よりとれる前後の地の
ハ皆全文なり

詞あくてハ意のさとり難き事多し。かゝる類ハ。その地の詞をも少しづゝのせゝるゝて。「」のゝるゝゝゝて別てり。

○軍記類其他原ハ片假字ゝてうけるも。今ハ皆平假字ゝ書うへて引きゝゝり。さるハ片假字ハ何とゝなくこちゝあくかゝくなゝきを平假字ハこよなくゝあだゝくのまゝて。なつゝのゝきさまゝゝれバあり。又原ハ真字ぢちゝかきなゝど。初學の輩の。ともゝきゝをバゝゝみ誤るべく見ゆる處ハ多く假字を書加へたゝる。見ん人原書と字様の異なるをないぶこのゝみそ。

目録

巻一　歴代　儀式　軍旅
巻二　地理　動植　言行　才藝
巻三　武勇　遊戯　俳諧　覊旅　離別附
巻四　哀傷　傳

評論附　説解附　教訓誡附　諫争　一
勅書　院宣御請文　将軍家御教書
消息

醍醐藏書

和文讀本卷一

稲垣千頴　輯

歴代

景行天皇の御世の段　水鏡

中山忠親公

次のみかど景行天皇と申しき。垂仁天皇の第三の御子。御母日葉酢媛命也。垂仁天皇の御世三十年正月甲子、日東宮ハ立給ふ。ちゝみかどふくりの御子ハ申給ふやう。おの〳〵心ゝ何をこの得んと思ふ

とのゝまふふ兄のみこゝろれハ弓矢なんほしく侍
るゝと申給ふ弟のみこゝろれハ皇位をなん得んと
思ふと申給ふこの言ふ従ひてこのみの御子ふ兄
は弓矢を奉り弟の御子をば東宮ゝ立て奉り給
へりしあり辛未のとし七月十一日位ふつき給ふ御
年八十四世をたもち給ふ事六十年なり五十一
年と申しふ年内宴行ひ給ひしふ成務天皇のいま未
ざみこゝと申しと君武内ゝそ其座ゝ参り給たぎり
しの皇子ゝ(ヨリ)みゝど尋させ給ひしゝ申したまもく人々の
みな御あそびのあひだ心をゆるぶべきをりあり其
時もしひまふゝのぐふ心あるものも侍らんふと思
ひて門を固めてなん侍ると申給ひしのバみゝど
いよ〳〵あゝ比びなく寵ど給ひき武内ハ孝元天皇
のむまご曾孫あり此後代々の帝の御うしろみ後見して
世ゝ久しくおはし在き今ふハ幡の御傍ふ近くい
はゝれたまへるハ此人ふいまを祀五十八年二月ふ近江
の穴穂宮ふうつりふき

後三條院天皇の御世の段 神皇正統記

北畠親房公

第七十一代三十八世。後三條院諱ハ尊仁（ト申ス）後朱雀第二の子。御母ハ中宮禎子内親王（陽明門院と申ス）三條院の皇女たり。朱雀の御素意ふて太弟ふ立給ひき。又三條の御末をも受給へり。昔もかゝるためし（例）侍りき。両流の内外ふ受給ひて。継體の主とあり（ヤ）しく（朱雀三條　父方母方）

戊申のとし即位。己酉（イトシ）ふ改元（アリ）。此天皇東宮ふて久しくおはしまされバ。ものふ和漢の文。顕密のをしへまでもくちこうじ（ヒ）たゝせ給ふ。詩歌の御製も。あまた人の口ふ侍るめり。後冷泉の末ざま。世の中あれて。民間の憂あり。四月（コノ天皇）より位ふ居給ひしうバ。いまゞ秋のをさめまも及ぶぬふ。世の中のなほりまる。有德の君ましまし（キリ）けるとぞ。申傳へ侍る。始て記録所といふ所をあられて。國々の衰へたることをあらためられ。延喜天暦よりこなる（テ）ハ。まことよかゝこき御事なりゝんこのし。天下を治め給ふこと四年。太子ふ讓りて尊號あり。後ふ出家せさせ給ふ。此御時よりぞ執柄の權あらそ（テ）られ

て君の御みづから政をきゝ給ふ事ようゝ侍ま
ゝ／／されど其頃までも讓國の後院中にて政務
ありゝは見えゝ四十歳あまり／／まゝしき

高倉院天皇の御世の段　神皇正統記

北畠親房公

第八十代第四十三世高倉院諱ハ憲仁（下申ス）後白河第五
の御子御母ハ皇后平滋子（建春門院と申ス）贈左大臣時
信の女なり戊子の／／即位己丑ふ改元（アリ）上皇
政を きゝ せ給ふ事 もゝの如し 清盛權を專よせ
一事ハ ことさゝふ此御代の事なり 其女德子（ジュダイ）入内
して女御とゝ即立后ありき 末つ方 やゝ／／所々反
乱の聞（エ）あり 清盛一家 非分のふるぎ 天意ふそむき
ゝるよゝそ（アリシ）嫡子内大臣重盛ハ心むく（意）さの（賢）しゝて
父の悪行なども諫め止めける（ガノ）さく世を早くきゝぬ
弥おごりを極め權をほ／きまゝふも時の執柄ふて
菩提院関白基房の大臣（おとゝ）せしも中らひ宜しゝの
らぬ事ありて 太宰權帥ふ遷しゝて配流せゝる 妙音
院師長大臣も京中を出さる 其ほゝふ罪せゝる

人あるべきうらき。従三位源頼政といひし者。院の御子以仁王として。元服ハあるべきこのど。親王の宣などぶふなくて。かくはかるる宮ふあるせ給を。きこめ申して。國々ふある源氏の武士等ふ相ふれて。平氏を失ちんと謀りけり。事あらはれて。皇子も失ぬ。頼政も亡びぬ。このれど。そをきより乱をそめてけり。一義朝。朝臣ぶ子頼朝。前右兵衛佐従五位下。平治のころ六位の蔵人たりしが。信頼事をおこしける時任官せ 平治の乱ふ。死罪を申宥むる人ありて。伊豆國ふ配流せられて。多くの年をあくるしが。以仁王の密旨を兼る。院よりも忍びて仰遣せ道ありけれバ。東國を きめて義兵を起しぬ。清盛弥〻悪行をのこなりけれバ。主上深く歎かせ給ふ。ちるふ遜位の事ありしも。世を厭もせまし。けるゆゑとぞ。天下を治め給ふこと十二年。世の中の御いのりふや。平家のあがめ申ふ。神なれバ。安藝の嚴嶋ふなん。参らせ給ひけるし。此みのど。御心むくもめでたく。孝行の御こころざし。深うき。管絃の方もきこえて。優あそ〻まし〻けり。尊號ありて。程なく世を早くあさ

まふ二十一歳おはしましき

兼久三年の條　増鏡

一條冬良公

兼久も三年ふなりぬ四月廿日みのどありさせ給（順徳　禪位）
ふ春宮（仲恭）四ツふあらせ給ふ君ゆづり申させ給ふ近頃
さな此御齢まして受禪ありられバこれもめでたき
御末あらんず同じ廿三日今ありさせ給へる君を
新院と聞ゆれバ御兄の院をバ中院と申し父みの（後鳥羽　土御門）
どをば本院とぞ聞えさせる　この程は家實のお（大）

とぐ（普賢寺殿の御子）　関白ふておはしつるを御讓位の
時左大臣道家の大臣（光明峯寺殿）　摂政ふなり給ふ彼
の東（アヅマ）の若君（頼経）の御父ありさてもあるべき構ふる事
忍ぶとすれどもうしく洩聞えて（東）ひごろざまふも（方）
其心づのひとぐこのめり東（アヅマ）の代官ふて伊賀判官光
季といふ者ありつぐ（且）これを御こうぐ（困）のよう
仰らるれバ御方ふ参るつわもの（兵）押寄せるふ
のがるべきやうなくて腹きりてうまづいとめでた
しとぞ院ハあぢまふもいみじうお

ゐて驟ぐ（下畧）

元弘二年隱岐の皇居の條　太平記

北小路玄慧等作

三月廿六日と申に（日）ふ御船隱岐國ふ着ふゐ佐々木隱岐判官貞清府島といふ所ふ黑木の御所を造りて皇居とゐ玉扆ふ咫尺して召使ゐる人とて八六條少將忠顯（下）頭大夫行房（下）女房ゐは三位御局ぢうなり昔の玉樓金殿ふひきつくてうきふ（緣）ゐげき竹だるき涙隙なき松のかき一夜を明ぐる程もたへ忍ぶへき御ぐちなゐ鷄く曉を唱へし聲（ナクテ）警固の武士の番（トノヰ）を催ち聲ばゐり御枕の上ふ近ゐれバ夜のおとゐふ入らせ給ひても露よどゐよせ給ちゐ萩の戸の明るを待ち〜朝政なゐれど（多）巫山の雲雨「御夢ふ入る時も誠（チマ）ふ曉ごとの御勤（ニ）北辰の御拜も怠らゐ（ル）ことゝ（ル）いのある年ゐれバ（カ）百官罪（ル）なゐして愁の涙を配所の月ふゐゐて一人（滿）位をうへ宸襟（チ）を他鄉の風ふなやま〜給ふらん天地開闢よりこのかた（ル）かゐるふ〜ぎをきこゐぢ（ル）されバ

天ふるる日月も誰ゞ為まの明なることを恥ぢ
ざらん心あき地草木も是を悲みて花さく事を
忘るべし

建武元年大内裏造營の條　太平記

北小路玄慧等作

翌年正月十二日諸卿議奏して曰帝王の業萬機
事をげくして百司位を設く今の鳳闕僅ふ方四
町の内ならばゞ分内狹くして禮儀ゝの所なし
とて四方へ一町づゝ廣ゞられ殿をゝ宮を造
らるゝ是あ古の皇居ふ及たらねばとて大内裏を
つくらるべしとて安藝周防を料國ふよせられ
日本國中の地頭御家人の所領の得分ふ二十分一をの
けめさるゝ抑大内裏と申ハ秦の始皇帝の都咸
陽宮の一殿をうつして造られたれバ南北三十六
町東西二十町のろ龍尾の道石を敷て四
方ふ十二の門をゝてられたり東ふハ中陽明門待
賢門郁芳門南ふハ美福門朱雀門皇嘉門西
ふハだらてん談天門さうへき藻壁門殷富門北ふハ安嘉門偉鑒門

どうちゝん（達智）。この外上東・上西の二門ハいとるまで。
交戟衛伍を守りて。長時ハ非常をいましめとり。
三十六の後宮ハ三千の淑女よそほひをかざり。七十
二の前殿ハ文武の百司ことゝりをまつ。紫宸
殿の東西ハ。清涼殿。うんめいでん（温明）。北ハ當て常寧殿。
ぢゆうくゝん殿（貞觀）。貞觀でんと申ハ。きさきまちの（后町）
北のをくしげどの（御匣殿）。也。けう志よでんと號せしハ（校書）。清
涼殿の南のゆゑどのなり。昭陽舍ハ。つぼ（弓場殿）。ちゝげ（淑景）
いしやハ桐壺。ひきゆう舍（飛香舍）。藤つぼ。凝花舍ハ梅つぼ。

襄芳舍と申ハ。ハ（下ロ）。うんなり（雷鳴）。のつぼの事なり。萩の
陣の座。瀧口の戸。鳥のざうし（曹司）。ぬひどの（縫殿）。兵衛の陣。左
ハ宣陽門（セン）。右ハ陰明門（ヤウ）。日華（ヒ）。月華の兩門ハ陣の座の
左右ハ對へり。大極殿。こあどの（小安殿）。蒼龍樓。白虎樓（ふ豊）。
らくるん（楽院）。清暑堂（ナドナ）。ごせちの（五節）。えんすゐ（淵醉）。だいがゆう（大嘗）。ゑ（會）。
ハこの所にて行はる。中和院ハ中の院（ナカ）。内教坊ハ雅樂（ウタ）
所なり。みゝほ（御修法）ハ真言院。ぎんごむじきハ神嘉殿（神今食）。ま
弓。くらべ馬（競）をば。武德殿にて御覽ぜらる。朝堂院
と申ハ（下ロ）。ハ省院の諸寮是あり。右近の陣の橘ハ

業平朝臣の故事ハ、神殿ハあゝ〻大平記誤れり。新古今集大江千里ごりもせぬ春のこのゆふぐれ月夜ふたくるのゆゑなき。源氏物語ハ似る物なきとあり。比喩花宴巻ハ見えず。

後會云々ハ渤海使のうたを送られる序の句なり。越の国とゝるハたゝ人へ。

昔をたのぶ香をとゞめみはしよりあゞる竹の葉ハ
いくよの霜をかさぬらん（御階）在原中将（業平）の弓やなぐひ（箙）
を身ふるゝて。この（雷）みあり（鳴）さらぐ（騒）よもすゝ。あばら
なる屋ふ居ゝ（ハ）りし（語）ハ。官の廳のたつしんでん（神）光
源氏の大将の。しゝ（如）物もなゝと詠ずつ。朧月夜ふ
あゝ（故）こゝ（心）れし（語）いこき（弘徽）でんの細どの（廊）。江相公（朝綱）のいゝへ。
越の國へ下ゝ（ハ）し（語）て。ふ旅の別を悲しみて。後會期遥。濡
纓於鴻臚之曉涙と長篇の序ふかきたり（語）ハ。羅
城ゝんの南ゝふ。鴻臚館のあゞりなり。鬼の間

ちよゝくろ（直盧）。鈴の縄（ゝり）。荒海の障子（朝綱）をハ清涼殿（ゝ）。極殿（ゝ）
る。けん（賢）ぞゝう（聖）の障子をバ紫宸殿ふでたてられる。
東の一の間ゝは。馬周。房玄齢。杜如晦。魏徵。二の間ゝは。
諸葛亮。蘧伯玉。張子房。第伍倫。三の間ゝは。管仲。鄧禹。
子産。蕭何。四の間ふゝは。伊尹。傅説。太公望。仲山甫。西の
一の間ゝは。李勣。虞世南。杜預。張華。二の間ふゝハ。羊祜。
揚雄。陳寔。班固。三の間ふゝハ。桓榮。鄭玄。蘓武。倪寛。四の
まふゝは。董仲舒。文翁。賈誼。叔孫通ゝり。畫圖ハ金岡
ぞ筆。賛の詞ハ小野道風ぞかきたりゝるとぞ羨る

鳳のいとのハ天ふかけり。虹のうつばり(梁)雲ふそびえ(聳)
さゝもいみじく造り雙べられ〜大内裏(モ)天災を
消さふ便なく(テ)回禄たびたびふあよびて。今は昔の
礎のみ残さり(下略)

儀式

朝賀(公事根源 正月元日)

一條兼良公

是を朝拜とも申ハたなり。辰の時ふ。大皇大極殿ふ

大極殿ハ。省院の正殿ふて。重き儀式ハ皆此処ふて行ふ。内辨とハ儀式の時門内ふ居て諸事を辨備する人をいふ。門ハ朱雀門ふて。大極殿の南門ふ。鉦をうつ云々。朱雀門の左右の陣ふ鼓吹騎兵等を列ーふる。近仗ハ近衛の次将をいふ。典儀ハ少納言をいふ。香ハ浅香・董陸香・青木香等ふ。舞踏ハ拜舞ともいふ。再拜ーて笏を置き立て袖を左右左ふ

行幸なりて行たせたまふなり。群臣ハ礼服を
着ーて。さゝめぐ御即位の儀式ふおなじ。内辨ふ
どもあり。開門(カイモン)などありて。めーのつぐをうさー(召)
むれハ。群臣列ーて門ふ入。天子高御座(タカミクラ)ふつのせさ
すへハ。兵庫寮鉦(ドラ)をうつ。執翳(シツエイ)出て。帳を八字ふかゝぐ。
近仗(コンヂヤウ)けいひつを右ふよろし。圖書主殿(トノモリ)香をたく。典(テン)
儀(ギ)再拜をとなふ。群臣(称)この時再ていまた奏賀。奏瑞(称)
ふて。二人のふの庭ふまゝみて。祝ひまうにこゝふ(キミキ)
うれた。去年のめでたき事どものあるを。國々よ

驚し居てまうこ左右左すゝ筋を取て小拜し立て又再拜するなり

檀原宮天和葛上郡天瑞はむすびめ饒速日命の天より降り隆り其子宇麻志麻治命の神武天皇に奉られし十種の神宝をいう

小朝拜は朝拜おき年関白大臣以下殿上の人清涼殿まで天子を拜し奉る儀ありて百官悉くは拜せば朝拜を畧

畧申せば。それを記して今日これを奏するなり。その時。群臣再拜をつぎに舞蹈(ブタウ)すれば。武官萬歳の旗をふるなり。いとめでたき儀式どもなり。神武天皇元年正月一日。檀原の宮をうてばじめて位ふつのせたまひる時。宇摩志麻治命。天瑞を奉らせられ。日本紀に見えたり。これなどを始とも申べき。又孝徳天皇の御宇。大化二年正月一日。御(ミ)のどを(朝拜)をがみのことをぐるよ。おなじ書ふのせたり。これぞまことの朝拜とは申べきなり。

ちる故ふ小朝拜という

春日社は大和国添上郡春日山にあり。藤原氏の祖神。天児屋命。建雷命。経津主命。比賣神の四神を祭る

ちりたる。六十六代一條院正暦より後はありともうけらまはらぬ。記録にも所見なきにやいかゝ。大極殿もありしのばなり。今は小朝拜ばかりぞなりふるる。

春日祭

建武年中行事二月の條

後醍醐天皇御製
北畠親房公修撰

上のひつゝの日。春日祭の使(未)をつかむ。昔は賀茂の祭のだに。今は近衛の隨(ズイ)

府の官人とは、近衛府の将監、将曹、府生などあり。無名門は、清涼殿の南にあり。うちきは、衣の支なり。大うちきぶうちき等あり。内侍は、内侍の女官なり。瀧口は、かと所の名なり。清涼殿の北にあり。武人の布衣をきて、且暮此処に候するをいふ。

身などをこのりて見ゆ。府の官人、さらだをま（摺袴）きて舞人をつとむ。賀茂のまつりのごとく使無名門のまへにふまゐりて、事のよしを奏す。舞人の（着）（物）ぬ、藏人いでて、禄のうちきひとくだりたまふ。（音）（領）申の日、暁、内侍（社ニ）むかふ。藏人出車を奉る。瀧口ともふさぶらふ。公卿、弁もろふぞむかふめる。（下向）（今日）（下向）

更衣　建武年中行事

後醍醐天皇御製

北畠親房公修撰

御殿は、清涼殿なり。御帳のかたびらは、夏は胡粉にて草をかくなり。女房は、女官なり。女官は、四月中はあをきぬにて、単は更衣のひとへとして、精好のさらしにて、重ぬるなり。

四月ついたち（朔日）御更衣なれば、ことごとく御装束あらたむ。御殿（ニ）御帳（帷）のかたびらおもてはさぐしふぐらん（生絹）（胡粉）おなじ。壁代（モ）籠の綱（モ）同じ物なれども、新しきを（モノ）かへたるみ（モ）同じ。燈（御殿）

ちとのぬ（モ）ぬ（モ）ぬ（モ）御ふく（服）は御なほし（直衣）御ぞ（衣）はさぐしにて（生）綾の御ひとへ（単）御たを（張）ぬ（袴）は内藏寮より是を奉る。女房のきぬ（衣）あをせのきぬ（袴）とも衣（更）のひとへ（単）

らきぬ（生）さぐしも常の如し。

撰虫　公事根源　九月の條

是ハあるぢ式ある事まはあるじ殿上の逍遥として殿上人ども遊びて嵯峨野などへむかひて虫を籠にえらびいれきて奉る是ハ堀河院の御ときよりはじまるおほよそ松むし鈴むしなどは誰人も内裏ふ奉る又賀茂の社司などに仰られてもめされるとなん

一條兼良公

軍旅

源頼信平忠恒をせめることと宇治拾遺物語

源隆國卿

昔河内守頼信上野守にてありし時坂東ふ平忠恒といふものありき仰せ(朝廷ヨリ)くだること(ヲ)なきゆゑ(幾)くふもるうらんとて多くの軍をおこして彼ゐを(ヲ)みちの方へ行向ふふ入海の遥ふさきに入りたるもの(ノ)ひふ家を作りて居たり此の海をまたるものあるべしもぐふ渡らゐそ(り)その日の中ふ攻めつぐられバ忠恒渡の舟どもを皆取隠してけ

りされバ渡るべきやうもなし濱ぞ（辺）ふうち立て、お
の濱のまゝふめぐるべきホトそあれと兵ども思ひと
るふ上野守のいふやう。この海のまゝふ廻まてよせバ日
頃へなん其間ふやもしまと寄られぬかまんもせ
れなん今日ふの中ふよせて攻んこそあのやつハ存外ホトふ
ちてあるてまどたんぜも然るふ舟どもハ皆取隠
したるいそぐはまぐべきと軍どもふとそれるふ
軍ども。さゝふ渡し給ふべきやうあり廻りてこそハ
よせきせ給ふべく候ためと申しられバこの軍ども

の中ふさりともこの道ありうる者ハあるべし頼信ハ
坂東方ハこの度こそ始めて見参されども我ゞの家
のつゝへまて聞置きたる事ありこの海の中ふ
ハ堤のやうふて廣一丈ばかりあてまぐふつゝ
る道あるあり深ハ馬のふとばらふたつとき
此程ふこそその道ハ當まるらめさりともこの
多くの軍どもの中ふありるもあるべんさゝ
先よりもて渡せ頼信つゞきて渡さんとて馬を加
きためてよせるまゞ知まる者まやありん四

五騎ばかり馬を海ふ打おろして、たゞちにうま渡
すれバ、それふつきて五六百騎ばかりの軍ども渡
しうり、まことに馬の太腹ふたちて渡る（ヲリ）多くの
兵どもの中ふ、たゞ三人だけのりぞこの道ハ知りうり
りる。残ハ露も知らぬぎりうり。聞（マシテ）く事だにもあり
うり。然るふこのかうどの。この國をバ、これこそ始ふ
ておさ（守方）さるふ。我（殿）よハ、これ（此処）の重代の者共にてあるよ。
きくだるもせば（マシテ）、知らぬふかく志給へるハ、げふ人ふ
勝ぎ、うるうちあ、道うあと、さらやきあぢて（私語怕）渡り給
ふ程ふ、忠恒ハ海を廻りてぞよせ給ちんぎらん。舟
ハ取隠したるをバ、浅道をバ、只我だのりこそ知るさ
れ。直ふハ得渡り給ちゞ。濱を廻り給ちんあひだふハ、
とかくもし。迫るちてんさうなくハ得攻め給ちゞ。
と思ひて、心静ふ軍揃へて居うふ、家のめぐりある
郎等。あらて走り来て云く。上野殿ハこの海の中
ふ、浅き道の候ひる（トコロ）より、多くの軍を引具して
已ふ、こゝ来給ひぬ。このぐせさせ給ちんと、こゝ（戰来）
き聲ふあらてゝいひられバ、忠恒、かねての仕度ふ

違ひて我さでふ攻られなんぢかゆうふ仕立奉ら
んと云ひて忽ふ名簿を書きて文挟ふみちさみふ挟
うてさ〜上げてふ舟ふ郎等一人のせて持せて逝
へて参らせうられバ守殿見て彼の名簿を受取
らせて云くあゆうふ名簿ふあ怠ちぶみを添へて
出にさでふきこれるなりされバああごちふ攻
むべきよ非ばとてこの文を取りて馬を引返〜
られバ軍ども皆帰まりぬ其後よりいとど守殿を
ば殊よ勝れていみじき人ふおち〜まさいよ〜

いられ給ひ〜

陸奥國十二年の合戰の時義家貞任の
連歌 古今著聞集

橘成季

伊豫守源頼義朝臣貞任宗任等をせむるあひだ
みちのくふ十二年の春秋をおくりぬ鎮守府を
たちて秋田の城ふうつる発ふ雪ふりて軍のを
のこどものよろひ皆白妙ちくよなりまりぬ衣河
の館岸高く川あり鎧られバ楯をいとぎきてかぶとふ兜鑿

かゞぬいゞをくみてせめ戰ふに貞任らさゝぐ
筏
して、ひ城のうしろよりのゞれおちける一男
後
八幡太郎義家衣河ふおひてせめふせてきてあく
もうしろを見まるものうちぞ引こんせ物い
後
ちんといたれとりれバ貞任見こゝろるふ
衣の縦ハほころびよりり
揖
とゝりるを貞任くつぎみをゆきらくゝろを
轡 休 鎧
ふりむけて
年を詠し糸のみだれのくるゝさふ
歷 苦

とつけとりり其の時義家たゞくる矢をさ
番
ゝて放りよりり。さばこりの戰の中ふゆさ
テ
うりる事のなし

小松内大臣殿兵を召ること　源平盛衰記

不知作者或云
葉室時長卿作

内大臣ハ入道なほ腹あゝき人あれバ院参の事
挿詞
もやあゝんぞらんと思ゝめゝりれバ其悪行を
塞ぐんぐゝめとおぼゝくて主馬判官盛國を使ふ
て重盛こそ別して天下の大事を聞出ゝたれ我を

我と思ふん者どもハ急ぎ参をとりよほされさう。
これをうけ給はるものども。おぼろげ（容易）ハ騒
ぎ給ふぬ人のかゝる仰の下るハまことゝ小別の子細
のあるふこと（アラン）にて。難波二郎経遠。妖尾太郎兼康。
筑後守家貞。肥後守貞能らを始として。如法夜中
の事なれども。我先ふと（事ラン）ぞ馳せ参りける。かゝる（ハ条ニ）れ
バ。老いたるも。若きも止る者ハなし。小松殿へとて（事ラン）あと
て参りたり。入道ハ何事ぞ。世間のものさわぎ
ハこれふ候へやゝ。とのゝさまひろれども。そら聞

このぞこしてをせゝでゐれバ西八條ゐは。青女房。老尼。
もしハふでとりたゝりぞ（筆執）残りゐる。水ゝも弓馬
ふたゝゞさはる程の者ハ一人もなくなりぬ。（下畧）

治承四年五月平等院の戦ふ足利忠綱
宇治川先陣のこと　源平盛衰記

不知作者或云
葉室時長卿作

此河ハ浪早ゝとゝんども底深ゝゝゝ。岩高ゝゝとい
へども渡瀬多し。河を渡して岸をあとゐ事ハ鐙
のふみやう。手綱のあやつり。よあり。馬の足をゐぞ

へて浪間を分けよ者どもとて進みられバ然るべ
きことなて伴ふ者ども中畧三百餘騎を伴ひられる足利
又太郎真先にうけて下知しられ此河ハ流あらくし
て底深し大事の河ぞあやまちせな肩を並べて
手を取組みさぐらん者をば弓筈ふ取つのせよ
強き馬をバ上手へ立てよ弱き馬をバ下手ふ並べよ
馬の足のとどうん程ハ手綱をもくりて歩ませよ
馬の足をとどまバ手綱をくれて游がせよ前輪よば
多くうれ水越さバ馬のさらづふ乗まうれ水

ふハ多く力を入さてよ馬まは軽く身をかくべし手
綱ふ實をあらせふさらとて引かづくな敵ふ目
をのけよ餘ふ仰のき内のうと射させな餘ふうつ
ぶきてへん射さたふ鎧の袖をまつかうふあてよ
水の上ふて身づろひもふ我ぞ馬弱しとて人の
馬ふかりて二人なるうおし流さるふ我等渡せ
と見るならば敵ハ矢ぶもつくりて射んぞらん
敵ハ射るとも あのうこし矢射んとて河の中ふ
て弓引て推流されて笑をるな弓の本筈わらもせ

ごりふうちのけよ。あまたが心を一ッふなし。えいごゑ出して渡すべし。かねふ渡してあやまちすな。水ふ従ひて。ながれをうらふ渡すべしとて。橋より上へ。三段ばかりうちあげて。三百餘騎さとうち入れ。えいゝしとをめきさけびて渡すより。橋のもとへ一段さがりければ。三百餘騎。一騎も流さで皆ぐしてむかひの岸へさとあがる。これを見て。千騎二千騎打入れ渡すより。二萬餘騎。馬と人とに防きて漏るゝ水こそ見えざりけれ。みづのゝ前後の勢ふ

つゞのぎして。十騎二十騎渡しける者は。一人もたまらず押流さる。大勢河を渡しければ。宮の兵ども。しばし平等院ふ引退く。足利又太郎は。西の岸ふうちあがりて。鐙踏ばり弓杖つき。物の具の水走らとのし。鎧づきせ。鎧は緋をどしふ金物うちたる。いまざ来の時とぞ見えし。白星のかぶと居頸ふ着なし。大中黒の二十四さしたる矢頭高ふ負ひ。重籐の弓の真中取り。紅のほろかけて。連銭葦毛の馬の太くたくましきよ。金覆輪の鞍置きてぞ乗りける。平

等院の総門の前ニ打寄て皆紅の扇ひ〳〵きつこの
ひ鐙踊たり弓杖つきて申〳〵るハ只今宇治川の
先陣渡せるモハ昔朱雀院の御宇兼平ニ将門をう
ちけん勸賞たゆう預りし下野國の住人俵藤太秀郷ぞ
五代の苗裔足利太郎俊綱ぞ子ニ又太郎忠綱生
年十七歳童名八王法師小事ハ知らぬ大事の軍ハ三
箇度いまだ不覺仕らぬ下畧

粟津原の戰源義仲最後の條 源平盛衰記

不知作者或云
葉室時長卿作

去年六月ニ木曾北陸道を上りしニハ五萬餘騎と
聞えしニ今四宮河原を落ちるニハたゞ八騎ニ
ハなぎざりろり粟津のをはりまは心ハ猛く思
へども運の極の悲しさハ主從二騎ニなりまろり
まして中有の旅の空獨ゆくなる道ゐれバ思ゆる
こそ哀ゐれ木曾殿鐙踊たり弓杖突て今井ニのる
まひけるハ日ごろハ何と思をぬ薄金ぞおどやらん
今日ハ重く覺ゆる也とのさまへバ兼平なんでふきる事
侍るべき日来ニ金も増らぬ別ニ重き物をもつけ

ぢ御年三十七(三ヲ)御身盛なり御方ふ勢なくれバ臆
し給ふ(候公)や兼平一人をば餘の者千騎萬騎ともお
ぼゝめ候ふべし つひに死ぬべき物故ふこゝろび
れ見え給ふな あのむこのひの岡に見ゆる一むらの松の
下ふ立寄り給ひて心ちづかに念佛申して御自害
候へ其程ハ防矢仕りてゆゞ(即)て御供申にべし あの
松の下へハ廻らば三町(モトルベキド)直には一町まはよもすぎ
侍らじ急ぎ給へとなく〳〵涙を押へ(テ)くどきくれ
バ水曾はなごりを惜そつ都までいのゝもある

べうりつれども てまで落来つるハ汝と一所ふ
て死なんと(テノコト)ありいづく迄も同じ枕ふ討死せん
と思ふなりとのゝさまへバ今井いのふこのくハのゝ
まふぞ君自害ふ給ふ兼平則討死(三待ル)なり是をこ
そ一所ふて死ぬる(コト)といふ申せ兵の剛なる(モノ)と申にハ
最後の死(イサマシキ)を申になり さてこの大將軍の宣旨を蒙
る程の人の雜人の中ふ打伏せられて首をとゝ
きん事(バ)心うるべし とゝ〳〵落給ひて御自害あ
るべしとせめ申をバ水曾誠ふと(サルコト)思ひ(テ)むこひの

岡の松をさして馳行きるり今井ハ木曾を先だて〻引返し〻命も惜まず戰ひるり木曾ハ今井を振捨て〻暇ふ任せて歩ませゆく比ハ元暦元年正月廿日の事なれバ峯の白雪深くして谷の氷もとけぎりるり向の岡へまぢこのひよと志しづら〻氷給べる田を横ふらつほどふ深田ふ馬を馳入れて〻うてども〻ゆのぎりるり馬も弱り主も疲れるりるれバとかくせんじるもうひぞふき木曾ハ今井やつぐくと思ひつ〻うしろへ見返りるりけるを

相模國の住人石田小太郎為久ぞ能引て放つ矢ふ内兜を射させて真額を馬の頭ふあて〻うつぶ〻ふふしまるり為久ぞの郎等二人馬より飛てあり深田ふ入りて木曾を引落しやぞて首をぞ取てるる今井是をみて今ぞ最後の命なる急ぎ御供ふ参らんとて進出で〻申〻るるハ日来ハ音ものきく〻ん今は目ものもみよ信濃國の住人中三權守兼遠ぞ四男朝日將軍の御めのとご今井四郎兼平なり鎌倉殿までも名ろ〻めたる兼平

ぞ首とりて見参ふいれよやとて數百騎の中まの
け入てさんぐふ戰ひられども大力の剛の者なり
られバ寄て組む者ハなし たゞ聞きて遠矢まのみ
ぞ射られるされども ろろひよけ者バ裏のくぼあき 缺 空
まを射ねバ手もおちぶ 兼平ハ箙ふ殘る八ぢぐ
間
の矢まて八騎射おとしられる 太刀を抜て申しけ
る ハ 日本一の剛の者の主人の御供ふ自害せる見
ちへ〳〵や東八箇國の殿ばらとて太刀の鋒口ふく
ちへ馬よりさかさまふおち貫きてぞ死まられる

兼平自害の後ハ粟津の軍もなをりられ

壽永三年二月生田森の戰ふ梶原二度の
かけの事 源平盛衰記

不知作者或云
葉室時長卿作

梶原ハ今ハ軍ばたひらなり 場平 寄せよ者共とて子
息の源太相具して五百餘騎をめそ中へぞ入ふ
られる此の手ふハ新中納言父子本三位中將大將と
して御座しける 子 ぞ敵内まふ入ると見給ひて二千
餘騎を差向けて梶原ぞ五百餘騎を中ふ取こめ

て餘さな漏さなと一時なとのりぞ戰ひ引るゝづを
も互ふひこのぎりけるぞさきぞ無勢あれバ梶原ハ
下手ふ廻て颯と引てぞ出さり引る源太ハいのふシ
と問へバ御方を離きて敵の中ふ取こめられ給ひ
ぬとゝふあなゝ心うやさてハ討れぬるまやアラシ景時生
きて何のせん景季ぞ敵ふ組て死あんとて二百
餘騎を相具して平家の大勢をのけ散して内ふ入
る聲をあげて相摸國の住人鎌倉權五郎平景
政ぞ末葉梶原平三景時ぞ彼景政ハ八幡殿の一の

郎等奥州合戰の時右の目射られながら其の矢
を抜のぎして當の矢を射返して敵を討ち名を
後代ふ留めし末葉なれバ一人當千のつもりぞ
子息景季ぞゆくへおぼつかなくて返し入きり我と
思ちん大將も侍も組めやゝと名のりのけて轡
を比べて責入りられバ名ゑまことふ恐れん
左右へさとぞ引退く源太尋ねよとて責入り見
れバ景季いまざ討れぞばゞめハ菊地の者ども
と射合ひるるぞ後ハ太刀を抜合せて名のりけ

りわぎみハ誰ぞ菊地三郎高望ぞ。わぎみハ誰ぞ梶
原源太景季と名乗て切合ひらり源太ハかぶ
とをうち落されあほらしハて三十餘騎ハ取籠
められて切合ひらるこの菊地三郎ハ押並べて引組
て馬の際ハ落重りて菊地ぞ頸をとり太刀の切
鋒ハさ〻貫きて馬ハ乘出でらるぞ父の梶原ハ行
合ひらり平三景時源太をうしろハなして矢お
りてハ進み禦戰ひて其の間ハ源太ハ鎧きせた
ばゝ中をめて寄せらる返しつ戰ひらる城戸口ハ

敷嶋ハ大和と
いふ詞の枕詞
ぶて敷嶋の大
和うさといふ
詞を畧して敷
嶋の道といひ

真鍋四郎五郎と名乗て出合ひらるぞ四郎ハ梶原
ハうられぬ五郎ハ手負ひて引退く平家の兵ど
も入替〻戰ひられども景時ハ源太ぞ死なぬ
嬉しさハ猛く勇みて竪さま横さま戰ひらるた
ばゝ息をもつぎられバ父子相具して引て城戸
へぞいでらるきてこそ梶原ぞ生田森の二度の
かけとはいをれられ詩歌管絃ハ公家仙洞の翫も
の東夷いのでら敷嶋難波津のことぞを存ぜべき
なれども梶原ハ心の剛も人ハ勝れきる道も

て和歌のことゝもるあり」古今集の序ふ難波津浅香山のうゝを歌の父母のやうなりとゝ〳〵るよりとれもまゝ難波津とのみいひて歌の事ふまゝるあり」

優なりける咲きみだれたる梅の枝をゆなぐひふ（箙）
添へてぞさゝたりける かゝれば花はちりぬきぬ
まほひハ袖ふぞ残りける

延元元年正月官軍都攻の條　太平記

北小路玄慧等作

楠判官山門へ歸りて翌日の朝律僧を二三十人作りたてゝ京へ下しこゝとの戦場ふして戸骸をぞ求めさせける京勢怪うて事のゆゝを問ひければ此僧ども悲歎の涙をおさへて昨日の合戦ふ新田左兵衛督殿北畠源中納言殿楠判官以下宗徒のひとゝ七人まで討ぎさせ給ひ候ふほどに供養の為ふ其戸骸を求め候ふなりとぞ答へける

将軍を始め奉り高上杉の人々是をきゝてあなふしぎやむねとの敵どもぞ皆一度ふ討れたりけるきてハ勝軍をバゆゝあるゝ官軍京をば引とりるいづくふ其首どものあるゝん取て獄門ふのけおほぢを渡せとて敵御方の戸骸どもの中を求めさせ（路）（大）
ゆれども是こそ（ソノ首ナラン）とおぼゝき首もあるゆゝ餘ふ

あらまほしさふ爰より面影の似たりける首を二ツ獄門の水よかけて新田左兵衛督義貞楠河内判官正成と書附をせられたるをいこのあるふくさうの者の為たりけん其札の側ふ是ハ新田似ふた首ありまさ正成げふも書るそらごとのあと秀句をしてそ書副へて見せたりける又同日の夜半たりふ楠判官下部どもふ松明を二三千燃一つをさせて小原鞍馬の方へそ下りける京中の勢ども是を見てもを山門の敵どもこそ大将を討をて今夜方々へ落ち行きげふ候へと申しられバ将軍もげふもとや思給ひけんさらばおとさぬ様ふ方々へ勢をさしむけられて鞍馬路へハ三千餘騎小原口へ五千餘騎勢多へ一萬餘騎宇治へ三千餘騎嵯峨仁和寺の方まで洩さぬ様ふ固めよとて千騎二千騎差分られて勢を置れざる方もなかりけりさてこそ京中の大勢大半減じて殘る兵も徒ふ用心をするハなこのりられさるほどよ官軍霄より西坂をあり下て八瀬藪里鷺森下り松ふ陣をとり諸大将ハ皆

一手ハなりて二十九日卯刻ハ二條河原へ押寄せて在々處々ハ火をかけ三所ハ關をぞあげける京中の勢ハ大勢ありし時だにもこのたびで引ー軍なりまーて勢をば大畧方々へ分遣はされぬ敵寄せべーとは夢にも知らぬ事なれバ俄ハあわてふためきて或は丹波路をさーてひくもあり或は山崎を志して逃るもあり心も發らぬ出家ーて禪律の僧ハあるもあり官軍ハさまで遠く追ざりるを跡ヨ引く御方を追懸くる敵ぞ

と心得て久我畷桂川邊まハ自害をもくる者も數をもくぞありける況んや馬物の具を棄てる事ハ足の蹈所もなかりける將軍ハ其日丹波の篠村を通り曾地の内藤三郎左衛門入道道勝ぞ館ハ着給へバ四國西國の勢ハ山崎を過ぎて芥川ハぞつきよける親子兄弟骨肉主從互ハ行方をもくべ落ち行きくれバ討ぎくる者をも生きてぞあるらんと憑みいきくる者をも討れてぞ死しらんと悲む下畧

延元元年五月湊川合戰の條　太平記

北小路玄慧等作

楠既ふ討れよりれバ将軍と左馬頭と一處ふ合ひて新田左中将ふ打ちて懸り給ふ義貞これを見て西宮ちりあとゞる敵は旗の紋を見るふ未々の朝敵どもなり湊川より懸る勢ハ尊氏直義と覺る是こそ願ふ所の敵なれとて西宮より取て返し生田森を後ふ當て四萬餘騎を三手ふ分けて敵を三方ふぞ受けられける

さるほどよ

両陣互ふ勢を振ひて鬨を作り聲を合せよろ一番ふ大館左馬助氏明江田兵部大輔行義三千餘騎ふて仁木細川ゞ六萬よきふ懸合て火を散して相戰ふ其勢互ふ討れて両方へ颯と引きのけバ二番ふ中院中将定平大江田里見鳥山五千よきうて高上杉ゞ八萬騎ふ懸合て半時ばかり黒烟を立てゝ揉合ひちり其勢共ふ戰疲れて両方へ颯と引きのけバ三番ふ脇屋右衛門佐宇都宮治部太輔菊地次郎河野土居得能一萬騎よて左馬

頭吉良石堂ゞ十萬よきゝ懸合せ天を響し地を動して攻戰ふ或は引組て落重りて首をとるもあり或は打違へて同じく馬より里落るもあり両虎二龍の鬪ふ何れも討るゝ者多ければ両方東西へ引のきて人馬の息をぞ休めける

新田左中將是を見給ひて新手の兵既ふつきて戰いまゝ決せぬこれ義貞ゞ自當るべき處なりとて二萬三千よきを左右ふたてゝ將軍の三十萬騎ゝ懸合せ兵刃を交へて命を鴻毛よりも輕くせり官軍の総大將と武家の上將軍とゞみゞの〳〵戰ふ軍なれば射落さるれども矢をぬくゝ隙なく組て下よりれども落合て助る者なし只子ハ親をまて〳〵切合ひ郎等ハ主ゝ離れて戰へば馬の馳違ふ聲太刀の鐔音いとゝ修羅の鬪諍とゝ成もはぎゝと粉し先ゝひと軍して引きたる両方の勢ども今ハいつを期まべきなれば四隊の陣一處ゝ舉りて敵と敵と相交り中黒の旗と二ツ引両と巴の

旗と輪違(ノタ)と東へ靡き西へ靡き磯山風ふ翩翻して入違ひるるばかりみて いづきを御方の勢と
は見えうこのぎ新田足利の國の争(ハ)今を限とぞ
みえたりける官軍ハ元来小勢なるをバ命を軽
くして戰ふと雖遂ふは大敵ふ懸負て殘る勢僅
五千餘騎生田ノ森の東より丹波路をさしてぞ
落行きける數萬の敵勝まのりて是を追ふ事甚
急なりされども そうりのなくひあるをバ義貞朝臣
御方の軍勢を落ち延びさせん為ま後陣ま引きさ

ぞりて このしあひ戰れるほどふ義貞の乘
らるたりける馬ふ矢七筋まで立ちるるあひだ
小膝を折りてたふるるる義貞求塚の上ふあり
たちて乘替の馬をまち給へども あくて御方
是をあくぎりけるよや下て乘せんとする人
ありける敵や是を見知りけんぎるはち取
籠めて是を討んとあけるが其勢ふ僻易して
近くハさふぐりるるぎども十方より遠矢
ふ射るる矢雨や(行カ)霰のふるがるる猶繁し義貞ハ

薄金といふ鎧ふ鬼切鬼丸とて多田満仲より傳
りたる源氏重代の太刀を二振はうれたりける
を左右の手ふ拔き持ちてさゞる矢をバ飛越え上
帶
る矢をバさゝらぶき真中をさして射る矢を
ば二振の太刀を相交へて十六までぞ切て落さ
れ列る中略小山田太郎高家遥の山れうへより是
を見て諸鐙を合せて馳参り巳ぞ馬ふ義貞をのせ
奉りて我ぞ身ハ徒立よなりを追懸る敵を禦ぎ
けるぞの敵あまたふ取籠められて遂ふ討れよりぬ

そのあひだふ義貞朝臣御方の勢の中へ馳入りて
虎口ふ害を遁れたまへり

和文讀本卷一終